

Art to Live 国際シンポジウム 開催のご案内

日程：2024年11月30日（土） 13:00～16:15

場所：京都市立芸術大学 C棟 講義室1

この度、一般社団法人日本現代美術振興協会（大阪市中央区 代表理事：森裕一）と、オフィス・エヌ（大阪市中央区 代表：宮本典子）は共同で、「Art to Live」プロジェクト※のプログラムとして、2024年11月30日（土）に京都市立芸術大学にて、障がいのある人のアート作品を現代美術として評価していくことを考える、国際シンポジウムを開催いたします。

登壇者には、サンフランシスコ近代美術館で「Creative Growth: The House That Art Built」展が開催中（10月4日迄）の、カリフォルニア州オークランドにある障がい者のためのアート施設、クリエイティブ・グロウス・アート・センター、名誉ディレクターであるトム・ディ・マリア氏や、1990年代よりアール・ブリュットやアウトサイダー・アートの分野で先駆的な展覧会をキュレーションしてきた小出由紀子氏、日本の公立美術館で唯一収蔵方針にアール・ブリュットを掲げている滋賀県立美術館ディレクターの保坂健二郎氏、専門的な美術教育を受けていない人々等、多様な人々の作品展示を通じて新たな価値観を提示している東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の大内郁氏、そして文化研究者・美術評論家として国内外で精力的な活動を行っている山本浩貴氏が並びます（登壇者略歴は3-4ページを参照）。

本シンポジウムは、世界の最前線で障がいのある作家を現代美術の領域へ導いてきたトム・ディ・マリア氏の国際的な活動を日本で聞くことができる、またとない機会であるだけでなく、日本においても、美術の主流にいなかった人々の表現に注目し、研究や批評、企画の対象として積極的に取り組む専門家たちが一堂に会して、障がいのある人の作品を現代美術として包括的に紹介し、評価・価値付けを行うことの意義や、その難しさ、課題とともに可能性について、対話をする貴重な機会となります。

本シンポジウムが、我が国日本で、障がいのある人の作品が現代美術として評価が進む契機になるべく準備をしておりますので、是非貴メディアでの紹介、並びに当日のご参加の上、記事執筆等を賜りますようお願いいたします。



1. Art to Live 国際シンポジウム チラシイメージ

開催概要

名 称：Art to Live 国際シンポジウム

日 時：2024年11月30日（土）13:00～16:15

場 所：京都市立芸術大学 C棟 講義室1

〒600-8601 京都市下京区下之町57-1

アクセス：地下鉄烏丸線・JR各線・近鉄京都線「京都」駅下車 徒歩6分

京阪電車「七条」駅下車 1番出口から徒歩10分

市バス 4、7、16、81、205、南5号系統 「塩小路高倉・京都市立芸術大学前」下車すぐ

日英同時通訳あり、参加無料、事前申込制、定員100名

後日アーカイブ配信予定

第1部 13:00～14:30

クリエイティブ・グロウスの50年の軌跡：自動車整備工場からサンフランシスコ近代美術館まで

登壇者：トム・ディ・マリア | クリエイティブ・グロウス・アート・センター 名誉ディレクター

聞き手：小出由紀子 | 小出由紀子事務所 主宰

カリフォルニア州オークランドにあるクリエイティブ・グロウス・アート・センターは、障がい者のためのアート・センターです。1974年の創設から現在まで50年に及ぶ活動の歴史を、社会の動きに照らしつつ振り返り、ターニングポイントとなった出来事について語っていただきます。アメリカにおける、アウトサイダー・アートと現代美術の関係性、現代美術におけるアウトサイダー・アートの位置付け、より広く「Art and Disability」について、クリエイティブ・グロウスのトム・ディ・マリア氏に、同氏と長年交友がある小出由紀子氏がお話を伺います。

第2部 14:45～16:15

障がいのある人の作品を、現代美術として評価していくこと

登壇者：保坂健二郎 | 滋賀県立美術館 ディレクター

大内郁 | 東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員、

(公財) 東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 文化共生課長

トム・ディ・マリア | クリエイティブ・グロウス・アート・センター 名誉ディレクター

小出由紀子 | 小出由紀子事務所 主宰

聞き手：山本浩貴 | 文化研究者、実践女子大学 准教授

これまで美術の主流にいなかった人々の表現に注目し、研究や批評、企画の対象として積極的に取り組むプロフェッショナルを招いて、活動の意欲や意義を伺います。また、障がいのある人など、マージナルな作品と向き合う際に経験する楽しさ、難しさ、課題とともに可能性について、さらには人間にとっての芸術表現は何かについて、共に学び考える機会にしたいと思います。

申込方法

専用フォーム(Google form)：<https://x.gd/IWQ4T>

10月1日より先着順にて受付。

定員に達し次第、申し込みを締め切らせていただきます。

上記フォームからの申し込みが難しい方は電話にて受付いたします (tel：06-6777-8303)。

登壇者のご紹介



2. Art to Live 国際シンポジウム 登壇者

(上中)トム・ディ・マリア
(上右)小出由紀子
(下左)保坂健二郎 撮影:木奥恵三
(下中)大内郁
(下右)山本浩貴 撮影:吉田志穂

トム・ディ・マリア

クリエイティブ・グロウス・アート・センター 名誉ディレクター

1999年よりクリエイティブ・グロウス・アート・センターのディレクターを務める。美術館やギャラリー、国際的デザイン企業との協働を通して、障がいのあるアーティストをコンテンポラリー・アートの領域へ導いてきた。クリエイティブ・グロウスを代表するアーティストについて、そして彼らとアウトサイダー・アートの関係、現代文化との関係について、世界各地で講演を行なっている。カリフォルニア大学バークレー校のバークレー美術館並びにパシフィック・フィルム・アーカイブのアシスタントディレクターを務めた後に現職。ロチェスター工科大学で美術学士、メリーランド美術大学で美術学修士を取得。2019年には、ニューヨークのアメリカン・フォークアート・ミュージアムより「ヴィジョンナリー・アワード」を受賞。

小出由紀子

小出由紀子事務所 主宰

1990年にシカゴでインディペンデント・キュレーターとして活動を開始。アール・ブリュットやアウトサイダー・アートの分野で先駆的な展覧会を多く企画。2000年東京に小出由紀子事務所を開設。主な展覧会に「ビル・トレイラー展」(ザ・ギンザ・アートスペース、Collection de l'Art Brut, Lausanne、1992年)、「Art Incognito」(Collection de l'Art Brut, Lausanne、1997年)、「ジュディス・スコット展」(資生堂ギャラリー、2001年)、「アフリカン・アメリカンキルト 記憶と希望をつなぐ女性たち」(資生堂ギャラリー、2007年)、「ヘンリー・ダーガー展」(ラフォーレ・ミュージアム原宿、2011年)など。編書に「アウトサイダー・アート」(求龍堂、2000年)、「ヘンリー・ダーガー 非現実を生きる」(平凡社、2013年)、「福田尚代作品集2001-2013」(2014年)、「鵜飼結一朗初期作品集」(2023年)など。様々な区分を超えて、人が表現することの源(ねっこ)を探りたい。

保坂健二郎

滋賀県立美術館 ディレクター

1976年生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程（美学美術史学分野）修了。2000年より20年まで東京国立近代美術館（MOMAT）に勤務。2021年より現職。企画した主な展覧会に「フランシス・ベーコン展」（MOMAT、2013年）、「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」（ハウス・コンストラクティブ他、2014-15年）、「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」（MOMAT、2016年）、「日本の家 1945年以降の建築とくらし」（MAXXI国立21世紀美術館およびMOMAT、2016-17年）、「人間の才能 生み出すことと生きること」（滋賀県立美術館、2022年）、「AWT FOCUS 平衡世界 日本のアート、戦後から現代まで」（大倉集古館、2023年）など。

大内郁

東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員、（公財）東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 文化共生課長

1977年生まれ。玉川大学文学部芸術学科卒業。千葉大学大学院教育学研究科美術教育専攻（芸術学）修了。千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程単位取得満期退学。大学院時代に障がいのある人や社会的マイノリティと表現について関心を深め、研究テーマとした。また、研究室が主体となる地域アートプロジェクトに参加。コミュニティアート事業企画会社での実習や交響楽団事務局企画制作部アシスタント、地方公共団体文化施設開設準備部署勤務など。2013年より薫工ミュージアム（高知）にてアール・ブリュットの展覧会等企画運営。2016年秋よりアーツカウンシル新潟プログラムオフィサー（社会包摂担当）。2018年冬に（公財）東京都歴史文化財団東京都現代美術館文化共生課に着任、2019年夏より現職。

山本浩貴

文化研究者、実践女子大学 准教授

1986年千葉県生まれ。2010年一橋大学社会学部卒業、2013年ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート修士課程修了。2018年、ロンドン芸術大学博士課程修了。アジア・カルチャー・センター（光州）リサーチ・フェロー、香港理工大学ポストドクトラル・フェロー、東京芸術大学大学院助教、金沢美術工芸大学講師などを経て現職。単著に『現代美術史——欧米、日本、トランスナショナル』（中央公論新社、2019年）、『ポスト人新世の芸術』（美術出版社、2022年）。共編著に『この国（近代日本）の芸術——〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』（小田原のどかとの共編、月曜社、2023年）。

シンポジウム開催趣旨・主催者挨拶

様々な分野において、インクルーシブで持続可能な社会の実現が目指されています。日本の福祉・芸術の分野の中でも、2018年6月に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が施行され、作品発表の機会や、評価の整備、この分野に関わる人材育成等の活動目標が掲げられました。

また、近年の世界的潮流として、障がいのある作家の作品を現代美術として取り上げる傾向が加速しています。例えば2013年の第55回ヴェネチア・ビエンナーレでは、アートとは異なる分野の専門家が制作した作

品（ユング、シュタイナー、ヒルマ・アフ・クリント）や、澤田真一など障がいのある作家の作品を現代美術の作家と共に展示したことで大きな反響を呼びました。その後もニューヨーク近代美術館や、パリのポンピドゥーセンター等の世界を代表する美術館で、これまでアール・ブリュット、アウトサイダー・アートと呼ばれてきた作品の評価・収蔵が進んでいます。最新の動向としても、2023年にカリフォルニアで50年の歴史をもつ障がい者のための施設「クリエイティブ・グロウス・アート・センター」の作品114点が、サンフランシスコ近代美術館に購入され、2024年4月から記念展覧会「Creative Growth: The House That Art Built」が開催されています。日本でも、公立美術館で唯一収蔵方針に「アール・ブリュット」を掲げている滋賀県立美術館が、購入や寄贈を通して、コレクションを充実させています。

障害のある人の作品を現代美術として包括的に紹介し、評価・価値付けを行い、作品を収集する動きは、日本国内ではまだ小さな流れかもしれませんが、世界的には確かな流れになりつつあります。本シンポジウムでは、このような世界的潮流の最前線を、クリエイティブ・グロウス・アートセンターのトム・ディ・マリア氏や、マージナルな表現活動に取り組むプロフェッショナルを招いてお話を伺います。また、障がいのある人に限らず、女性やBIPOCなど、これまで美術の主流にいなかった人々の作品が評価を受ける際に直面する困難や課題についても、美術の問題として、そして社会の問題として考える機会としたいと願い、当シンポジウムを企画いたします。

事業主体：

大阪府「2025 大阪・関西万博に向けた障がいのあるアーティストによる現代アート発信事業」

主催: 大阪府

実施主体：一般社団法人日本現代美術振興協会、カペイシャス

企画アドバイザー: 小出由紀子事務所

コーディネーター: 田崎奈央

研究協力：京都市立芸術大学 美術学部 准教授 谷澤紗和子

※Art to Live プロジェクトについて：

障がいのある方の作品を現代美術として紹介し、その社会的認知を広げていくためのプロジェクトです。

大阪府「2025 大阪・関西万博に向けた 障がいのあるアーティストによる現代アート発信事業」のプロジェクトとして2024年6月にスタートしました。

構成団体は、capacious (カペイシャス) という名前で大阪府内の障がいのある方の作品を紹介してきた オフィス・エヌと現代美術のアートフェアART OSAKAなどを長年手掛けてきた一般社団法人日本現代美術振興協会による共同事業体です。

広報用画像について：

1. 公式チャリイメーと、2. 登壇者一覧を用意しています。

Art to Live 公式ホームページ： <https://art-to-live.net>

お問い合わせ：

Art to Live 事務局

〒540-0012 大阪府中央区谷町5-6-7 中川ビル3B

一般社団法人日本現代美術振興協会 内

担当：宮本、川西、室谷

Tel：06-6777-8303 E-mail：info@art-to-live.net